

慈濟

ものがたり

資源再生は愛の循環





撮影・黄筱哲

慧命がこの世に永続するように

● 扉の言葉 文・證嚴法師 訳・済運

仏法の真理は無常を示し、

三理の側面から四相の過程で生滅を繰り返します。

正道に励んで心を清めれば、

慧命はこの世に永続するでしょう。



2018年にラオスでダムが決壊し、大洪水が発生した時、慈済人は被災地に深く関わり、物資の配付を行った。受け取った「福慧ベッド」の上に嬉しそうに座っているのは、被災した家庭の子どもだ。

(撮影・蕭耀華)

福慧ベッドは、慈済が緊急時のニーズに応じて研究し開発した「避難所七宝」の1つである。支援に使用されるこれらの救済用具は、環境への影響と天然資源の浪費を最小限に抑えるため、回収プラスチックなどから作られている。



慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】

地域社会の守護者

善耕／訳 4

【慈済のSDGs】「資源を再生して、愛を循環させる」

地球はあなたに感謝している

惟明／訳 8

一分間のできる 避難スペース 完成！

高雄外国語チーム
日本語組／訳

10

ペットボトルから作られた毛布 届けた数は百三十万枚以上

何慧純／訳

28

【大地の守護者】「宜蘭県陳秀雲さん」

末期がんでも続ける

葉美娥／訳

36

【台湾慈善】

介護者の重荷を軽減 私はまだ運べる

江愛寶／訳

48

【證嚴法師のお諭し】

学んでこそその覚り

慈願／訳

58

智慧で福を造りましょう

【グローバル慈善】

中東から帰還 大愛を訳す

荳荳／訳

64

スマトラ島沖地震津波から二十年
インドネシア・アチエ

楊琇光／訳

70

もう一度与えられた命

【命の贈り物】

私の心の奥にある誇り

何慧純／訳

95

【行脚の軌跡】

愛と善は唯一の方向

済運／訳

100

慈済の出来事 7/26 - 8/25

済運／訳

106

地域社会の守護者

台湾は台風シーズンに入ったが、台風一号が発生する前の六月に、慈済ボランティアは新北市防災士養成成果発表会に出席し、全市の防災士の数が正式に一人を超え、マイルストーンを共有した。この数年間、慈済は政府と連携して防災士養成講座や避難訓練を推進し、地域社会を守るために協力している。災害救助から災害への備え、そして防災に至る歩みの中で、慈済は慈善活動により経験を積み重ねてきた。それは慈済が向かう必然的な方向でもあった。

慈済基金会国際長の曾慈慧（ツン・ツーフウイ）さんは、五月に開催された「全米災害救援ボランティア機構（NVOAD）」の年次総会で、「卓越したリー

ダーシップ賞」を受賞した。曾さんは次のように述べた。「慈済は台湾から始まって、今では世界中の災害現場に赴いています。證嚴法師の教えである『傾聴、思いやり、尊重』でもって被災者に寄り添い、仏教の人文的な思いやりを実践に移してきました。今回の受賞は慈済人全体の荣誉であり、私はただ基金を代表して受賞しただけです」。また彼女は、慈済が災害支援の時に提供する買い物カードや、日常的に災害時のために備蓄しているエコ毛布などの物資が、国際的な緊急支援プラットフォームで賛同を得ていることに、特別に言及した。

アメリカ慈済は、設立以来三十六年間、着実に慈善活動に取り組んできた。二〇〇一年の九一一同時多発テロの時、慈済は総額二百万ドルの救済金を提供して三千世帯余りを支援した。当時、被災者に直接現金を贈呈した唯一の

慈善団体でもあった。二〇〇五年にハリケーン・カトリーナがニューオーリンズに甚大な被害をもたらすと、慈済は初めて、物資と引き換えができる買い物カードを配付した。こうした奉仕の結果、慈済は二〇〇六年に赤十字社の推薦により、正式にNVOADのメンバーとなった。

一九七〇年に創設されたNVOADは、非営利団体間の調整責任を負う、国レベルの災害ボランティア組織連盟である。二〇一八年の年次総会では、大愛感恩科技公司のエコ毛布が「年度イノベーション賞」を受賞した。二〇二三年には、NVOADに登録している緊急支援団体の代表者が、「慈済のペットボトルをリサイクルして作られた毛布は、手触りがとても柔らかくて、丈夫です。すべてを失った人々にとって、きつと慰めになるでしょう」と称賛した。今年は、さまざまな団体が援助物資の展示を行った。その中には、浄水装置や緊急支援キッチンカー、住宅再建ツールキットなどの救援物資も

含まれていた。中でも慈済のエコ毛布や福慧間仕切りテントは、パートナーの間で大変人気があった。年次総会は、循環型経済を防災システムに取り入れていくことができればと願っていた。

今月号の月刊誌『慈済』の『慈済SDGsシリーズ』は、テーマが「資源再生は愛の循環 地球が感謝」である。慈済が研究し開発した回収プラスチックによる再生製品には、よく知られている物として、折り畳み式で持ち運び可能な福慧ベッドや回収されたペットボトルから作られたエコ毛布を含むベッドや収納棚、机、椅子、蚊帳、間仕切りテントなど、いわゆる「避難所七宝」があるが、気候変動や資源不足などの環境の脅威の下では、このような再生可能で再利用できる循環型経済の推進がますます緊急性を要していることと、これらの物資の背後にある最も貴い価値観が、慈悲の心と思いやりと実践であることを、人々に理解してもらうのに役立っている。

（慈済月刊七〇四期より）

地球はあなたに感謝している

資源を再生して、愛を循環させる

慈済は、緊急時のニーズに応じて支援ツールを開発しているが、その取り組みは、発願に始まって優れた成果を得るまで、二十年以上に及ぶ。

これらのツールは、気象災害の緊急援助に端を発しているが、環境への影響と天然資源の浪費を最小限に抑えるため、回収プラスチックなどから作られている。そのうちペットボトルは、リサイクルボランティアによって丁寧に仕分けされている。

これこそが、環境保全と人道支援を結びつけた善の循環型経済であり、国連の持続可能な開発目標（SDGs）の理念に合致している。

2018年にラオスでダムが決壊し、大洪水が発生した時、慈済人は被災地に深く関わり、物資の配付を行った。受け取った「福慧ベッド」の上に嬉しそうに座っているのは、被災した家庭の子どもだ。（撮影・蕭耀華）



SDGsの
対象領域



8 働きがいも
経済成長も



9 産業と技術革新
の基盤を作ろう



11 住み続けられ
るまちづくりを



12 つくる責任、
つかう責任



13 気候変動に
具体的な対策を

【慈済の活動×SDGs】シリーズ

一分間でできる 避難スペース 完成！

文・葉子豪（月刊誌『慈済』執筆者） 訳・高雄外国語チーム日本語組

素早く設置できて、プライバシーにも配慮した「一分間でできる避難スペース」は、回収した「再生原料」で作られており、慈済の災害支援だけでなく、蚊帳と間仕切りテントは、アメリカの慈善団体からも備蓄物資として認定されている。

一〇一〇年十月、女の赤ちゃん、シャナは洪水後に誕生した。その時パキスタンは、主要河川であるインダス川が氾濫して百九十万棟の住宅が損壊し、二千万人以上が被災した状態だったので、慈済ボランティアがシンド州でその家族に出会った時、全財産を失った彼らは、木の棒で一枚の布を支えた中に寝泊まりしていた。生まれたばかりの赤ちゃんは、ぬかるんだ地べたにむしろとシーツを敷いた上に寝かせるしかなかった。

「被災した人々はとても苦しんでいましたが、それ以上に、水浸しの地面に寝かせておくなど、見て耐えられることで

はなく、私はずっと気が気ではありませんでした」。映像を通してシャナたち一家の厳しい状況を目にした證嚴法師は、ただちに災害支援チームに対し、何とかして被災者の居住環境を改善し、最低ベッドだけでも確保するようにと指示した。時間がなく、必要な数も多かったため、災害支援チームはアメリカのボランティア、張義朗（ジョン・イーロン）さんに、開発中の「プラダン製組み立て式ベッド」を生産ラインに乗せられないか、と打診した。

二〇一〇年末、九千六百セット余りのベッドが、数回に分けてパキスタンの被



2010年、パキスタンは100年に一度の大洪水に見舞われた。慈済災害救援チームは10月、被害の大きかったシンド州タッター県で現地調査を行った。生後15日の女の赤ちゃん、シャナ（中央）は両親と共に粗末なテントの下にいた。（撮影・蕭耀華）

災地に届けられた。そのベッドの枠は細長いプラスチック板を「井」の字の形に交差させてあり、地面からわずかにセンチの高さしかないという応急的なものだったが、それでも住民たちに喜ばれた。ベッドがあれば、テント暮らしとはいえ、少しは暖かく眠ることが出来るからだ。

パキスタンでの災害支援の経験は、安心して過ごせる設備の重要性を浮き彫りにした。法師はその設計を、フィリピンの慈済ファミリー出身の建築士・蔡思一（ツアイ・スーイー）博士に委ねた。元々慈済営建処（建設部門）に所属し、病院

の建築設計を担当していた蔡さんは、それ以降、工業デザインの分野に踏み出し、人助けのための「神器」を設計する、職業と志業を兼ねた道を開拓した。

「その時すでに折り畳み式のもの構想していました。折り畳み式と組み立て式とでは、実は全く方向性が異なるのです。組み立てには時間がかかり、慣れないと方法を間違えるかもしれません。そこで、できるだけシンプルで、工具を使わず、繰り返し使えて運びやすいものを目指しました」と蔡さんは当初の設計コンセプトについて語った。

蔡さんは、まず先人たちの研究成果を

振り返った。スチール製のパイプベッド、キャンプ用の折り畳みベッド、エアーマットなどの長所と短所を詳細に分析し、災害支援の現場における実用性を検討した結果、蔡さんは独自の道を進まなければならないことに気づいた。

福慧ベッド、海を越えての初登場

洪水でベッドが水に浸かると、膨張して変形したり、錆びて傷んだりするため、蔡さんは食品用の高品質PP樹脂とステンレスパイプを組み合わせることにした。水に強く、洗浄や消毒もしやすい。

まった。その直後、過酷な災害現場での実地検証に臨むことになった。同年十一月、強い台風三十号（ハイエン）がフィリピンを襲い、大きな被害をもたらした。台湾とフィリピンの慈善人は、大勢の人と大量の物資を動員して災害支援にあたった。折り畳み可能で輸送しやすい福慧ベッドは、即座にその強みを発揮した。

「台風ハイエンの後、兄の昇航、姉の奇珊、妹の青児がみんな援助のためにフィリピンの最前線に行きましたが、私だけは花蓮に残りました。当時、福慧ベッドはまだ新しい製品で、私は、どうやって大量に運ぶか、どう梱包するかと

だが、量産までには多くの課題があった。

最初に試作された「コンセプトベッド」は重量が二十キロを超え、暑い日に横たわると、蒸し暑くて不快だった。改良に改良を重ね、表面に丸い穴をびっしり開け、高さも三十センチ弱にした結果、強度と重量、通気性のバランスのよいベッドが完成した。「完成版」は、広げると少し狭いシングルベッドになる。折り畳めば重量も十五キロと軽く、手で持ち運ぶにも、車に積むにも、空輸するにも便利だった。

三年間にわたる研究と改良を経て、二〇一三年ついに、本格的な量産が始

いった後方作業に当たらなければならなかったからです」と蔡さんは福慧ベッドをフィリピンに輸送した時のことを振り返った。福慧ベッドは四十フィートコンテナに五百床積むことができた。折り畳めない普通のベッドなら二、三十床でいっぱいになっただろう。

福慧ベッドは台風ハイエンの被災者に休息をもたらした他、慈済の支援で建設されたオルモック大愛村の仮設住宅の入居祝いにも使われた。また、アジアだけでなく、アメリカ大陸、ヨーロッパ、アフリカの各国で、避難生活を支える力を発揮している。台湾でも緊急援助に活用

され、「百年たっても分解されない」というプラスチックの弊害が、逆に「高い耐久性」という長所へ転換を遂げている。

二〇二四年七月、台南の慈済ボランティアが台風三号（ケーミー）の被災者を見舞うため、白河区河東里の糞箕湖を訪れた時、福慧ベッドを高圧洗浄機で洗って

いる人を見かけた。話を聞くと、その家は二〇一八年八月の熱帯低気圧による水害で被災し、ベッドが水に浸かって使えなくなってしまったため、ボランティアが急いで福慧ベッドを届けたのだという。

復旧後に新しいベッドを購入したもの、思いもよらず、六年後に再び水害が



台風30号（ハイエン）によって深刻な被害を受けたフィリピン・レイテ州パロ町で行った配付の場所で、ボランティアが福慧ベッドの使い方を実演していた。（撮影・ナヤンシャ）

発生し、ベッドがまた水に浸かってダメになってしまったそうだ。しかし、幸いにも福慧ベッドは流されず、外に出して洗い、日光で乾かせば使うことができた。

福慧ベッドは、ドイツのレッド・ドット・デザイン賞「最高品質賞」を受賞した。蔡さんも福慧ベッドをはじめとする優れた生活、災害支援用品の設計が評価されたことで、台湾十大傑出青年「華僑青年特別賞」を受賞した。しかし彼は、すべての功績は自分の心の中の最も偉大な「デザイナー」のものとと言う。

「実のところ、どれも法師の智慧による発明です。私たちの手を通して、それ

を形にただけなのです」と蔡さんは敬意を込めて言った。

カートにもなる収納棚

福慧ベッドと同様に折り畳み式で運搬しやすい福慧テーブルと椅子は、蔡さんの発明だが、避難時に必要な道具一式へと次第に「常備品化」され、緊急時にも安心して過ごせるようになった。しかし、二〇一八年の〇二〇六花蓮地震の時に蔡さんは、ある重要な物を想定していなかったことに気づき、愕然とした。

「当時、余震を恐れて自宅に戻れない

人が大勢いました。精舎の師父や慈済人たちは、すぐに温かい食事や福慧ベッドを避難所に届けました。法師は、私にも何か改善できるところはないか見てきてほしいとおっしゃいました」。

花蓮県立体育館に避難した住民たちは、福慧ベッドとエコ毛布などの必要な備品を受け取り、食料の心配もなかったが、広い体育館の中は、まるで数百人が寝起きする「大部屋」のような状態で、何をするにも、プライバシーと言えるようなものはほぼ皆無だった。そして物を収納することもできなかったため、多くの人が自分の持ち物と支援機関から配付

された物を福慧ベッドの下に押し込んでいた。

避難所の問題点を知った法師は、蔡さんに間仕切りと収納棚の開発を指示した。翌年には「エコ福慧間仕切りテント」が完成した。使用されている生地は、リサイクルされた六百ミリリットル入りのペットボトル二百八十本分から作られている。広げた時の面積は一・八坪ほどであり、中には福慧ベッド二台と福慧テーブルと椅子の一セットを置くことができる。高さは百六十五センチあり、ほとんどの人の視線を遮ることができた。

福慧間仕切りテントは登場するや否



や、直ちに各地の慈済災害対応チームに導入された。二〇二四年の〇四〇三花蓮地震では、中華小学校などの避難所に大勢の被災者が押し寄せたが、慈済人はこれまでと同様、毛布と温かい食事、福祉ベッドなどの物資を提供した。ただ、これまでと違っていたのは、福祉間仕切りテントがあったことだ。これまでと比べてプライバシーの確保が格段に向上し、他人の目をはばかることなく赤ちゃんのおむつ替えや大人の着替え、さらには気兼ねなく悲しみを吐露することができるようになった。

しかし、実際に使ってみると、改善す

べき点も見つかった。蔡さんによると、「見た目はシンプルですが、日頃から使い方が畳み方を練習しておく必要があります。それに、〇四〇三花蓮地震の後に気づいたのですが、各地に一定量を備蓄しておかないと、いざという時にボランティアが車で運ばなければならなくなるのです」。

短期間で設計して量産を開始した福祉間仕切りテントに比べ、収納棚の開発は六〇七年もの長い歳月を要し、二〇二五年の年初にやっと完成して発表にこぎ着けた。なぜそれほど時間がかかったのだろうか。

「収納棚にもなり、カートにもなるという、そんな製品はどこにもなかったので、開発にはずいぶん頭を使いました」と蔡さんは話す。「福祉収納棚」の設計コンセプトの出発点は、災害時には配付した食糧を運搬し収納する必要があるからだだった。被災者が受け取る穀物や油、日用品などは、合わせると二十キロ以上になることも多く、しかも、受け取りに来る人の多くは女性や高齢者である。そ

今年1月の嘉南地震の際、台南市楠西区に開設された避難所。慈済は福祉間仕切りテント、福祉ベッド、エコ毛布を提供し、安心して過ごせるスペースを設置した。（撮影・王永周）



台灣佛教慈濟基金會

TAIWAN BUDDHIST TZU CHI FOUNDATION



れでも重い荷物を持って、長い距離を歩いて帰らなければならなかった。

「ですから、引いて運べるだけでなく、家に帰った後も積み重ね、衣装ケースや本棚、食器棚として利用できるようにし

ました。貧しい家では、食べ物を入れる場所がないとネズミに食べられてしまうので、法師は、戸棚に入れて守る必要があるとおっしゃいました」。

収納棚の形が決まったことで、蔡さん

福慧テントはさまざまな場面で活用されている。アメリカ・カリフォルニア州キャンベル市で行われた地域施療活動でも、間仕切りテントは診療中のプライバシー確保に役立った。(撮影・蔣国安)

が思い描いていた「一分間でできる避難スペース」はついに完成した。この一式は二人部屋を想定しており、福慧ベッド二台、蚊帳二張、日用品二セット、収納棚六つ、さらに間仕切りテントと福慧テーブルと椅子が一つずつ付いている。「しかも、すべて環境に優しい素材で作られています。それが私たちのこだわりです」と蔡さんは補足した。

世界の舞台に立った

「避難所七宝」

環境保全を着実に進めるために、蔡

さんが設計した一式は、原材料を、すべて「バージン原料」から回収物由来の「再生原料」へと切り替えられた。間仕切りテントと蚊帳などの生地部分はペットボトルから作られ、テーブル・椅子・ベッド・収納棚などの素材は、回収された電子工場の基板スロットやPPカップなどを使い、環境保全と慈善を結びつけて、循環型経済を実践し、サステナビリティを推進している。

二〇二四年四月、慈済はアメリカ連邦緊急事態管理庁（FEMA）の本部で「諸宗教指導者気候レジリエンス円卓会議」を開催すると同時に、「避難所七宝」を

展示した。エコ毛布と六種類の「ジンスー福慧家具」（福慧ベッド、机、椅子、蚊帳、間仕切りテント、収納棚）で構成されているものだ。

アメリカの政府機関やNGOなど多くの参加者は、福慧間仕切りテントの中に入り、エコ毛布が敷かれた福慧ベッドに横になって体験した。そのうちの一人は、「とても丈夫なのが分かりました」と称賛した。

アメリカ政府の災害救助部門や赤十字社、救世軍などといった経験豊富な救済団体から高い評価を受けたことは、慈済が開発した製品が、さまざまな気候や環境の下でも、確実に命を守る力を発揮で

きることを示している。

慈済慈善事業基金会の曾慈慧（ズン・ツー・フイ）国際長によると、FEMAは慈済のエコ毛布に感銘を受けると共に、緊急援助活動における重要性を認識し、認定救済物資として登録したという。エコ毛布は、慈済がアメリカで援助を行う時に配付する物資として、今や欠かせないものとなっている。

緊急援助の七つの宝のうち、毛布以外に、蚊帳と間仕切りテントも協力パートナーから注目されている。曾さんによると、現在すでに二十を超えるアメリカの慈善救済団体が福慧間仕切りテントの購



入を計画しているという。教会で不法移民を保護するために使用されたり、授乳室やカウンセリングルームとして活用されたりする場合もあるという。「蚊帳が重視されているのは、気候変動によって雨量が増え、水たまりが蚊やハエの発生源になっていくからです。ですから私たちは、プライバシーを守る間仕切りテントと安全を守る蚊帳の二つを備えることが重要だと強調しています」。

慈済が災害支援のために開発してきた製品は、理念や環境への配慮、創意工夫のどの面でも非常に優れているが、最大の「欠点」はまだ数が足りないことだ、

と曾さんは考えている。

エコ毛布を例にとると、国連の緊急対応基準を満たすには、平時から四十フィートコンテナ約四十個分の備蓄が必要であり、慈済の現在の在庫量ではまだまだ足りない。益々、深刻化する気候変動による災害に対応するために、エコ毛布、福慧ベッド、福慧間仕切りテントなどの物資の生産と備蓄量を増やしていきたいと曾さんは思っている。

開発を始めてから現在に至るまで、慈済の緊急援助のための「神器」は、たゆまぬ改良が重ねられてきた。「一分間でできる避難スペース」を完成させた蔡さん

は、次のステップとして「屋外での避難スペース」に取り組むそうだ。住む家がなく、辛い野宿を強いられる人々のために、「五分で建てられる家をつくり、安心して寝泊まりできる場所を提供したい」と、蔡さんはデザイナーとしての意欲を語った。（参考資料提供・慈済高雄オンライン勉強会）

気候災害への対応に国際的な関心が高まる中、イギリス・アストン大学でフォーラムが開催され、イギリス、台湾、日本の専門家による意見交換が行われた。ジンズ・テクノロジー開発長の蔡思一さん（左）は、ジンズ・福慧間仕切りテントと福慧家具の設計理念や活用事例を紹介した。（撮影・王素真）

届けた数は百二十万枚以上

慈済のエコ毛布は、十九年間で世界中に出荷され、その数は百三十九万枚以上に上る。毛布の一本一本の繊維は、リサイクルボランティアが回収して分別したペットボトルから、研究開発チームが作り上げたものである。単に一枚の毛布であるだけでなく、愛と善意が織り込まれているのだ。

「観

客席に座っていた母親たちは目を見張り、この暖かい毛布が、ペット

ボトルから作られたとは信じられなかつ

たそうです。それだけでなく、慈済人が地球環境を護り、子供たちに美しい環境を残すために努力していることにも感動

していました」。慈済ボランティアの陳淑女（チェン・スウーニユ）さんが、ポーランドでのウクライナ難民に対する配付会場で見た光景を思い出して言った。

二〇二二年二月にロシア・ウクライナ戦争勃発して以来、慈済はその一年間に、祖国から逃れた八万人以上のウクライナ難民に対し、三万八千枚余りの買い物カード、そして、四万枚余りのエコ毛布を届け、異国で寒い冬を暖かく過ごせるようにと支援した。

十六年前の台風八号（モーラコット）から、このロシア・ウクライナ戦争、ア

メリカの山火事に至るまで、ボランティアは、住む家をなくした被災者や難民にエコ毛布を配る時、必ずその毛布の由来を説明することを忘れないようにすること、それを受け取る人々に、その温かい織物には、慈済ボランティアの地球に対する愛と、苦難にある人々への思いやりが込められていることを伝えてきた。

二〇二三年二月六日、トルコとシリアの国境地帯でマグニチュード七・八の強い地震が発生した。慈済は内湖志業パークから八千枚余りの「厚手のエコ

毛布」を調達し、トルコへ空輸した。「毛布だったら、トルコでも買えますが、その意義は違ってきます。これらのエコ毛布は、台湾のリサイクルボランティアが、地球を愛護する気持ちを心に抱いて一つ一つ回収したペットボトルから作られています。これらの毛布を必要としている人々に、この温かさを感じても

らいたいのです」。トルコの慈済ボランティア、胡光中（フー・グワオンヅオン）さんが懇切丁寧に説明した。

二〇〇六年から本格的に量産を始めて以来、エコ毛布は、国内外で災害時の緊急援助を行う時に、合わせて百三十九万枚以上が出荷されている。台湾の「環境保全菩薩（リサイクルボ



エコ毛布は、47の国と地域を支援してきた。ポーランドでは、戦火を逃れてきたウクライナの人々の体と心を温めた（撮影・安培渾）。



ランティア」が回収して分別したペットボトルを、低炭素・低消費・低汚染の製造プロセスを経て製品にしたのがこの毛布であり、世界各地の支援で活躍している。循環型経済において、再利用とリサイクルという段階を具体的に実践しているだけでなく、一見変哲もない毛布が媒体となつて、愛と善意を伝えているのだ。

（慈濟月刊七〇四期より）

花蓮の0206地震では、静思精舎の師父と慈濟ボランティアたちが、倒壊したホテルで被災した人々に、温かい食事とエコ毛布を速やかに届け、飢えと寒さを和らげた。

（撮影・邱繼清）

環境保全＋慈善

慈濟の「避難所七宝」

撮影・蕭耀華（月刊誌『慈濟』フォトグラファー） 訳・惟明

二〇一三年の台風三十号（ハイエン）による風災から、昨年の〇四〇三花蓮地震、台風三号（ケーミー）及び今年のミャンマー大地震に至るまで、慈濟の緊急援助の基本物資である「エコ毛布」と「ジンスー多機能福慧ベッド」は、あらゆる場面で見ることができるといえる。そして、深いのが、回収資源を使って研究開発を経て作られたものということである。

これをきっかけに発展を続け、「エコ毛布」に「ジンスー福慧家具シリーズ」の六点を加えたものが、避難所でプライバシーを尊重しながら、基本的な生活ニーズを素早く満たしている。

1 ジンソー福慧蚊帳(シングルサイズ)

- 福慧ベッドに設置、または吊るすことができ、天然の蚊除け成分を含む。
- 20本のペットボトルで製造。

2 エコ毛布

- 保温性が高く、乾きやすい。全世界で配付された数は139万枚を超える。
- サイズ：230cm × 180cm、67本のペットボトルで製造。

3&4 ジンソー福慧机・椅子

- 中空構造で、素早く折り畳み可能。
- 回収PPとステンレスパイプで製造。

5 ジンソー福慧間仕切テント

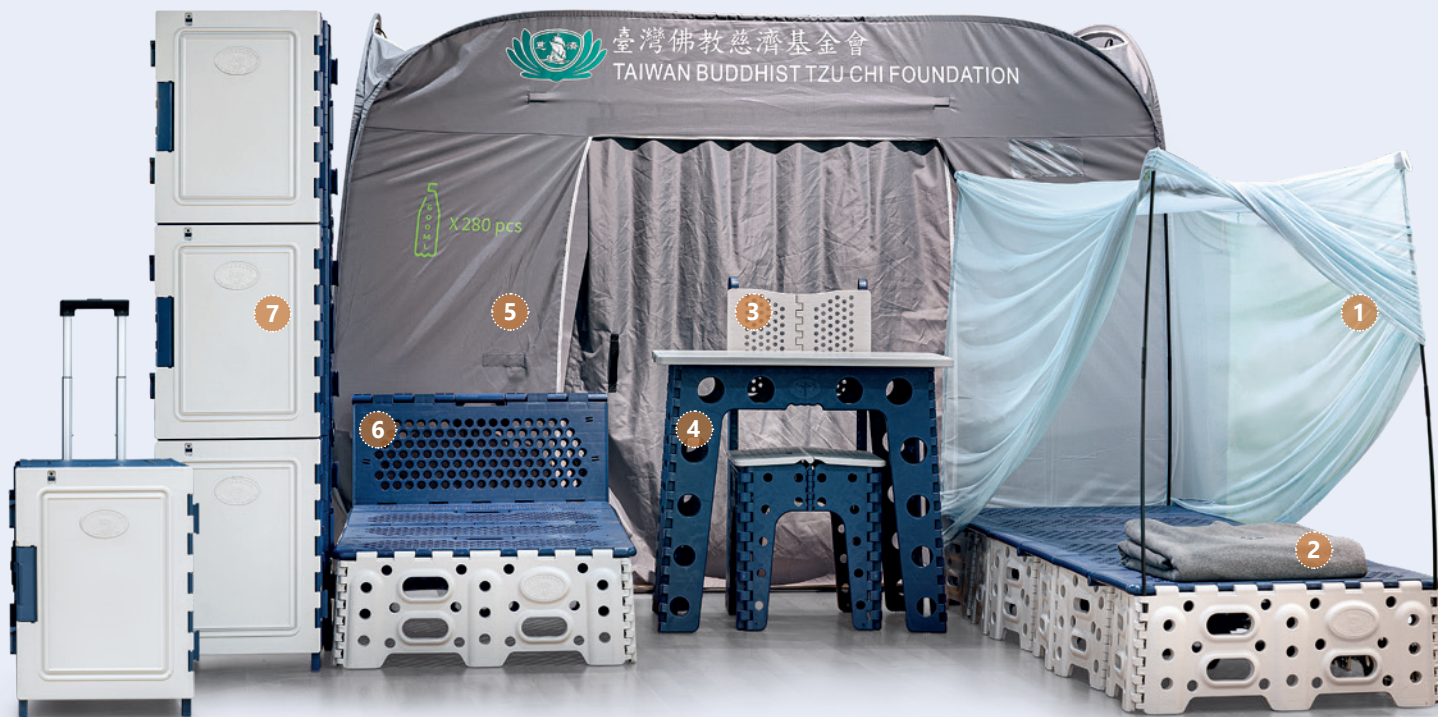
- 折り畳み式で素早く設置可能な携帯型。展開時の囲い面積は約1・8坪、高さは視線を遮るのに十分。
- 280本のスプリング鋼フレームとペットボトルで製造。

6 ジンソー多機能福慧ベッド

- 素手で広げてシングルベッドが椅子に変形が可能。
- 重量15キロ、耐荷重150キロ。
- 回収PPプラスチックとステンレスパイプで製造。

7 ジンソー福慧収納棚

- 折り畳み式で、キャスター付き。
- 積み重ねると戸棚になり、伸縮ハンドルを引き出すとカートにもなる。耐荷重20キロ。
- 箱は再生PP製、キャリーバーはアルミ製。
- 回収PP製ハンガーを組み合わせると衣装棚としても使用可能。



大地の
守護者

宜蘭県

陳秀雲さん

◎文・黄筱哲、蔡瑜璇 撮影・黄筱哲 訳・葉美娥

末期がんでも続ける

身を切るような冷たい風が顔に吹きつけるうす暗い空の下、龜山島が海にぼつかりと浮かんでいた。波が灰色の堤防に勢いよく打ち寄せ、しぶきが上がった。一人のお婆さんが、目を凝らしてリサイクル可能なものを探していた。彼女の目には、海岸にあるすべてのボトルや缶、プラスチックは環境への負荷として映る。取るに足らない存在に見える彼女だが、誰にも知られることのない物語がある。



取材に出発するので、宜蘭県頭城鎮に在住する環境保全ボランティアの陳秀雲（チェン・シユウユン）お婆さんに、前もって電話をかけた。お婆さんの声は大きく元気いっぱい、かなり話好きだった。しかし、彼女が自身の過去を話してくれた時、私は啞然とした。お婆さんは中年以降、三つのがんに罹っており、今も末期の肺がんで、分子標的治療を続けているという。しかし、会話からは、彼女が癌の重症患者とは全く感じられなかった。その上、想像し難いのだが、病気に苦しみながらも、リサイクル活動をしていることである。化学療法の副作用はないのだろうか。他の人だったら、きっと気分がどん底に落ち込み、憂鬱な気分から抜け出せないであろう。なぜ、お婆さんはこんなにも樂觀的で前向きでいられるのか。一体どんな力が、彼女

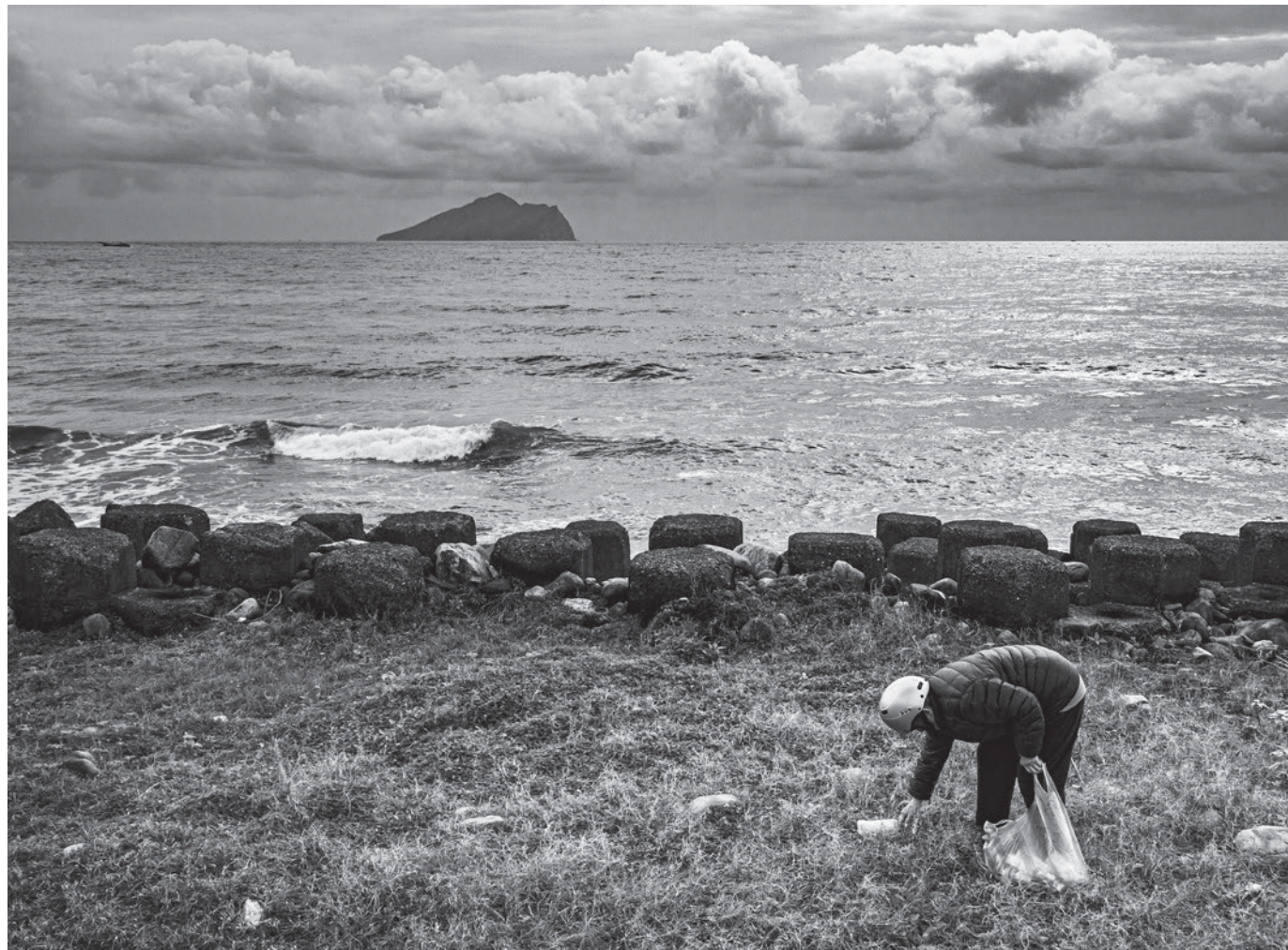
をエネルギーに満ち溢れさせ、気楽に残りの人生に向き合わせているのだろうか。

揺るぎない精神

秀雲お婆さんは、毎朝三時に起きて、『大悲咒』と『般若心経』をそれぞれ二百回唱えてから、祈願し、回向している。空が明るくなると、身支度してリサイクル活動に出かける。こうして彼女の一日が始まる……。

自分の目で確かめないと信じられないことだが、目の前で、海岸で腰をかがめてリサイクルできる物を拾っている年寄り、は、実は末期ガンの患者なのである。八十歳の秀雲お婆さんは、頭城鎮に生まれ育ち、この土地と海に深い愛着を持っている。

二〇一四年に證嚴法師の「皆で環境保全をしましょう」という言葉を聞いて以来、環境保全の重要さを感じて投入するようになった。自ら実行するだけでなく、周りの家族や友人たちにも、資源の回収を暮らしの中に根付かせようと呼びかけている。長年、病気に苛まれてきたが、自分を病人だと思ったことはなく、勇敢に無常の試練を受け入れ、弛まず奉仕し続けている。このような揺るぎない精神は、まるで遠く波間に凜としてそそり立つ亀山島のようなものである。



道中の風景

その日、秀雲お婆さんに付いて行き、路地を通って、バイクに回収資源物を載せる彼女の姿を見た。道すがら、住宅や旅館、民宿等の前にまとめて置いてあった回収物を載せて行った。バイクは積める量が限られているので、先ず近くのリサイクル拠点に運び、荷物を降ろしてからまた、次の回収場所へと向かった。すべてを回収し終わるまで、こうして行ったり来たりしていた。

また彼女は、わざわざ近くの烏石漁港と海岸に立ち寄って、捨てられた瓶や缶があるかどうかを確かめ、完全にきれいになっているのを見てから安心してそこを離れるのである。途中で多くの野良犬に出会ったが、面白いことにお婆さんは、





大きな声で、それぞれ犬たちの名前を呼んだのだ。そして、どの犬もお婆さんのことを知っているようで、バイクが止まるとすぐに近寄ってきて、撫でてほしいとせがみ、お婆さんを喜ばせた。毎日リサイクル活動に行く時、道で出会う野良犬たちがお腹を空かせていることを心配して、必ず食べ物を持って出かける。長く付き合っていると、その犬たちは友人のようになり、お婆さんを見かけると直ぐ寄ってくるのだ。

お婆さんの純粋な慈愛は、環境を大切にすることを体現しているだけでなく、生命を慈しむ行動にも表れている。彼女が無私の奉仕をすることこそ、私たちはこのように真実の、しかも貴重な善美の光景を目にする幸せに恵まれたのだ。

余生で願うこと

お婆さんは普段から一人で三食を作り、住まいもきれいに片付けている。午前中は資源の回収に出かけ、午後の時間に家事をする。時間を無駄遣いしない彼女は、やれることならいくら苦労しても苦労と思わない。私は好奇心を抑えきれず、こう尋ねた。「お体はとても辛いのではないですか?」。すると、お婆さんは「病気の間は辛いですよ。とても苦痛で、何も喉を通らなかつたり、吐いたりすることもあるけど、病気のことは考えないで、起きられたら

続けることができるのよ。できることをすればいいのよ……」と答えた。

お婆さんはそう言いながら、何気なくノートを取り出した。そこには、毎日お経を何回唱えたかを「正」の字で書いてあり、また毎年回収したペットボトルの数も細かく記されていた。二〇二四年現在、その数は七十六万五千本に達していた。その時初めて、お婆さんにはもう一つの願いがあることを知った。それは、生涯で百万本を回収するという願いである。この驚異的な記録は、単なる数字の積み重ねだけではなく、お婆さんの揺るぎない信念の実践でもある。彼女は、病苦に意志を砕かれることなく、生死を達観し、粘り強さと智慧をもつて生きている。あのびつしりと書かれた筆跡には、苦しみを乗り越えた彼女の大きな願いが込められている。お婆さんは自分の健康を祈ることなく、残りの人生を環境保全に尽くしている。お婆さんの願いが叶うように、心からここで祈っている。





重いベッドフレームをエレベーターのないアパートの上層階に運ぶのは容易ではない。ボランティアたちは戦々恐々として、怪我をしないように注意している。

慈済エコ福祉用具プラットフォーム 内湖拠点 介護者の重荷を軽減 私はまだ運べる

慈済エコ福祉用具プラットフォームの台北内湖拠点が設立されて三年、回収と運送件数は十倍に激増し、平均して一日に四・五件の福祉用具を運んでいる。ボランティアは介護者の重荷を代わりに担うことはできないかもしれないが、彼らが家族を介護する場合のストレスの軽減に努めている。

週

末の早朝、一台の白い小型トラックが、台北慈濟内湖志業パークから申請者たちに届けるために、三台の介護用電動ベッドとマットレス、エアマットレス（ベッド）及び車椅子、トイレチェア等の福祉用具を載せて出発した。

出発する前、ボランティアの姜禮強（ジェン・リーチャン）さんは、丁寧に福祉用具をチェックしながら、「一つ一つチェックしなければ、忘れものがあるかもしれません。そうすると、もう一度行き来しなければなりませんから」と言った。

他のボランティアは忙しく福祉用具を車の上に固定し、走る途中で動いてぶつけないようにした。内湖福祉用具プラットフォーム拠点窓口の呉敦榮（ウー・ドンロン）さんは、何人かの申請者に連絡して、翌日のスケジュールを話し合った。

数年前、呉さんのお母さんは血糖値が上がりすぎて転倒してしまい、臀部を骨折したので、車椅子で生活する必要がある。当時、内湖リサイクルステーションが回収した車椅子で当面の急場を凌いだのだが、母親の行動を助けること

ができてとても役に立った。彼はそれに深く感動したことで、慈済エコ福祉用具プラットフォームのチームに参加するようになり、コミュニティに恩返しして大衆に奉仕している。

姜さんは二十年余り前に、すでに福祉用具を届けた経験がある。彼は豚肉フレック工場を運営していたが、毎日朝早くからフレックを作るために、七、八十頭の豚をトラックで運んでいた。慈済に加わってからはベジタリアン食を作るようになり、リサイクルにも取り組むうちに、回収された病床や車椅子に出会った。最初はそれを分解して回収していたが、後

に浪費だと思うようになった。それを必要としている人がいることを聞くと、自ら届けに行った。「あの時は今のような規模ではなく、使えるものがあれば、そのまま必要な人に届けていました」。

慈済エコ福祉用具プラットフォームの内湖拠点が二〇二二年設立された時、申請案件は八十三件だったが、二〇二四年には五百六十件になった。さらに驚くべきは、運搬量が百六十一件から千六百五十二件まで増えたことである。平均して毎日四・五件を運んでいることになり、ボランティアたちの責任も益々重くなっている。洗浄消毒チームは、気

温が低く寒い日でも同じように用具の洗浄と消毒に専念し、申請者が清潔で新品のような福祉用具を受け取れるようにしている。そして、整備チームは部屋の一角で黙々と故障した福祉用具を修理し、舞台裏の秘書チームと運搬チームは、毎日各自の持ち場で頑張っている。

台湾全土で一日に 百件を配送している

現在、離島の金門、馬祖を含めた台湾全土の各自自治体にエコ福祉用具プラットフォームが設立され、合計で百三十余り

の拠点がある。二〇二四年を例にとると、ボランティアは平均して毎日百十件のエコ福祉用具を配送している。中古の福祉用具の寿命を延ばすだけでなく、物を大切にしたい申請者の気持ちにも沿っている。

エアマットレスは長年寝たきりの患者の床ずれ問題を助け、ハイバックの車椅子は脊椎問題を抱えた患者に普通以上のサポートと快適さが提供できる。福祉用具ボランティアの専門知識は、実務と教育トレーニングの中から学んだもので、介護者が安全にこれら器材を使用する上でサポートできるようになった。

福祉用具を届ける過程で、ボランティア

たちは様々なチャレンジに直面する。彼らはそれを「レベルを超えてモンスターと戦う」と表現している。彼らは曲がりくねった道や険しい道路を通り、違法駐車車両や山積みされた雑物をうまく通り抜けながら、目的地に届けているのだ。

時には、申請者は交通量が多い所に住んでいて、トラックの駐車が困難なため、ボランティアたちは徒歩で運んでいるが、その途中で人々の温かさを感じることもある。「道路脇の店の店主は、私たちが福祉用具を運んでいることを知ると、駐車スペースを空けて暫く止めさせてくれるだけでなく、車も見張ってくれ

るのです」と呉さんは微笑んで言った。

運搬の過程は体力に対する一大試練でもある。特に電動ベッドがその最たるものである。ボランティアたちは、運ぶ時のスキルをよく身につけておく必要がある。さもないと怪我をしやすいからだ。また、古い建物にはエレベーターがないので、狭い階段に沿って上り下りしなければならず、曲がり角に來ると、チームの一層緊密な協力が必要である。

相手の笑顔を見ると、嬉しい

東湖路に住んでいる陳さんは、年若い



た姑が寝たきりなので、エアマツトレス
が必要だ。ボランティアたちは旱天の慈
雨のように、お母さんが退院する前に、
それを家まで届け、そして、根気強く使
用方法を説明した。陳さんは、ボラン

ティアたちを階下まで見送ると言い張る
ほど感激しながら皆に感謝した。
同じように心温まる話がある。新明路
の林さんのケースである。九十五歳とい
う高齢の母親のために、病床を一台申請

運搬チームは回収した福祉用具を運んで戻ってくると、洗浄消毒チームに渡して
清潔・整理する。修理や部品交換を済ませると、倉庫に保管して、申請者を待つ。

した。「お婆さん、お幾つですか?」「朝ご飯、食べましたか?」お婆さんは、年は取っていても、聴力が良くて、機転も利き、ボランティアたちとスムーズに受け答えしていた。ボランティアたちは、母親に対する家族の心遣いを感じて感動した。そして、母親の笑顔を見て、つくづく奉仕の意義を感じた。

意気投合した人と 一緒に福を呼ぶ車に乗る

七十歳過ぎのボランティア、詹飛雄（ジャン・フエイション）さんは、運搬

参加して福祉用具チームと縁を結んでからは、運搬チームに加わるようになった。この道のりで、ボランティアたちは愛と感動的な物語を分かち合うと共に、お互いに視野を広げた。それまでの職業とは関係なく、慈済のユニフォームを着れば、腰を屈めたり、運搬したり、祝福を届けたりして、皆が無私の気持ちで行動している。この福祉用具を運ぶトラックはまるで「福を呼ぶ車」だ。なぜなら、多くの福田を耕すボランティアを乗せ、一緒に有意義なことをしているからである。帰り道で、互いの苦勞を話し合う時、皆いつもこう答える。「確かに大変な仕

していた時に、絶えず自分の背中を叩いていた。実は、前回運搬した時に不注意で肉離れを起こし、まだ治っていないかったが、また任務に着いたのである。彼は「大した事ではありません。まだ、運べます!」と言った。ボランティアたちは彼を労って車の番をすればいいと勧めたが、彼は相変わらず何度も運搬の手伝いをし、苦勞を厭わなかった。

ボランティアの張逸銘（ジャン・イーミン）さんはコロナ禍を経験し、人生の無常を体得した。中国から台湾に帰ってから、全力でボランティア奉仕に投入した。彼は一年前に酸素濃縮器研修講座に

事で疲れますが、また来ます!」彼らは、福祉用具を使用者の家に届けに行く時、生活における便利さを届けるだけでなく、それ以上に祝福を届けていると信じている。ある使用者は経済的に福祉用具の費用を負担することができない、と呉さんが分かち合った。「彼らが福祉用具を受け取った時の笑顔を見ると、私たちは奉仕に意義を感じます。私たちが使用者の代わりに生活の重荷を背負うことはできないかもしれませんが、彼らが家族を介護するストレスを軽減することはできます」。

（慈済月刊七〇一期より）

学んでこそその覚り 智慧で福を造りましょう

慈善の仕事は人に感動を与えることが大切です。

空腹の時にはお腹を満たし、

支援を提供して暮らしを安定させるのです。

ですから、皆さんの清らかで無垢な智慧を結集し、

支援の方法を考えるのです。

智慧があつてこそ、この世に幸せをもたらすことができます。

七

月六日、嘉義に初めて上陸した
台風4号（ダナス）は、凄まじ

い勢力で、屋根瓦をも吹き飛ばした後、
大雨が降り続き、不便で困難な生活が
続いています。一つの台風で、こんな
にも多くの人を困難に陥れているので
す。私たちは天を敬い、地を愛し、更
に世の人々に関心を寄せて、慈善活動
を全面的に開始し、貧富を問わず、す
ぐにでも皆で被災者の心を落ち着かせ、
彼らの生活を取り戻させなければなり
ません。

今回の雲林、嘉義、台南一帯の災害
では、南部の人たちが集まって被災後

の作業を受け持ってくれ、それぞれの
地域で団結していることに感謝します。
それはよく言われるように、「不請の師」
であり、台湾の慈濟人は皆それができ
るのです。自分も同様に被災してい
ても、それを後回しにして、一緒に他人
の困難を先に解決してから、自分の家
のことを処理しに行くのです。です
から、慈濟人の心は真の菩薩心であり、
愛で以て奉仕し、法縁者の間でもお互
いに関心を寄せ合い、大切にし合わ
なければなりません。

七月初め、南部へ行脚しましたが、
慈濟人がお互いに関心を寄せあつた話

を聴いて、いつものように安心しました。さらに、毎回風災の後の緊急援助で、温かい食事を提供することは、最も心を温めます。皆それができたのです。初期の支援では、それぞれの慈済人の家から電気釜を持って来て、温かい食事を作っていました。皆が真摯な心で、社会に尽力していると感じました。

台湾でも世界でも、災害が発生した時、私はいつも先ず、皆の無事を尋ねます。無事であれば、状況を理解し、関心を寄せて、どうやって助けるかを検討します。慈善機構は社会のニーズ

に応えるだけでなく、ましてや慈済は「無縁大慈 同体大悲（無縁の人に大慈をかけ、相手の身になって悲しむ）」精神を持っており、何の関係もなく、血縁者でも知人でなくても、苦しんでいる声を聞けば、直ちに慰め、寄り添い、支援しなければなりません。これが菩薩であり、その悟りを開いた有情が即ち、「覺有情」なのです。

慈済の慈善行為は、直ちに支援するだけでなく、相手が感じ入るようにしなければなりません。空腹の時はお腹を満たし、配付したお金や提供した援

助で、彼らの心を落ち着かせ、生活を安定させるのです。表面的で、象徴的なものであってはいけません。そこで必要なのが、皆が結集して、清浄無垢な智慧でもって実行する方法を考えるのです。智慧があつてこそ、人々に幸福をもたらすことができるのです。

ですから、よく「学」と「悟」と言っているように、日頃から一途に学び、どうすれば菩薩になれるかを学ぶのです。どうやって一歩も間違わずに「覺有情」になるかです。一旦何かが発生すれば、智慧で以って直ちに投入する

のです。これも成長の因縁であり、私たちに与えられた試練なのです。

今の時期は、台湾の風災だけでなく、世界中で四大不調が起きています。現代の危機は非常に大きく、人と人の間で、もし不和があれば、科学技術も発達しているため、戦争による被害は、以前よりも深刻になり、取り返しのつかない人間（じんかん）の悲劇に発展してしまいます。

心ではとても心配するのですが、役に立てなくて無念さを感じるため、直ちに奉仕しなくてはならないのです。

普段より防災に努めると共に、それ以上に人心の浄化が重要となってきました。人心が浄化されれば、正しい方向に行動でき、行動に規律があれば、雰囲気がとても和やかになります。もし人間（じんかん）の生活に規律がなければ、乱気流を形成して災難をもたらします。

仏陀が言われたように、人間（じんかん）は火宅の如く、衆生はまるで火宅の中で遊び呆ける子供のようには無知で、物質欲に駆られ、たとえ大地を破壊しても求め続け、意に沿わなければ、癪癪を起こします。無明は火花のよう

に絶えず散らし、その数が多くなると業の火になってしまいます。

衆生には元々如来の智性が備わっており、仏と同等の大慈悲心を持っています。しかし、何世も輪廻するうちに、益々仏性から遠ざかってしまいました。仏陀はこの世に来て、迷いから転じて悟れるよう教育しました。それには学が必要があり、群衆に交じって学び、苦を見て福を知り、菩薩心を起こして苦難を取り除いてあげるのです。台湾はこの数十年間、大方平安ですが、災害は私たちに警告しており、慎重に大自らの教えを受け入れ、敬虔な心で平安

を祈らなければいけません。誠意とは生命を愛護し、大切にすることであり、できる限り菜食することで、その誠意を表すのです。衆生の肉を口にするのを忍びなく思い、敬虔に斎戒を守り抜くのも、大愛を表す方法なのです。

そして、人々に愛を呼びかけ、共に善行するのです。愛を無限大に広げ、欲望を抑え、怒りを抑えれば、この

の世は瑞気に満ち、平和で、災難はなくなるでしょう。心して精進してください。

（慈濟月刊七〇五期より）



中東から帰還 大愛を訳す

アラブ世界に四十年間滞在し、

戦争までも経験したイスラム教徒の林楠松（リン・ナンソン）さんは、アラビア語を通して華人社会とアラブ世界との間に架け橋を築いた。今も信仰は変わっていないが、視野は以前よりも広くなった。

「皆」さんが助けてくれたからこそ、私はより多くの人々を助け、喜びを

与え、彼らの人生をより良いものにする機会を得たのです。ありがとうございます、證嚴法師。ありがとうございます、慈濟」。台湾で迎えた

二〇二四年の年末、法師との心温まる分かち合いの中で、マンナハイ国際学校教務主任のオメル・イルマズ氏は、自分の避難体験と、同校でボランティアとして働くまでの道のりを語った。アラビア語

で語られた彼の心の声は、通訳兼ボランティアの林楠松（リン・ナンソン）さんによって忠実に中国語に訳され、伝えられた。

敬虔なイスラム教徒で今年六十五歳になる林さんは、四十年間リビアに滞在し、目まぐるしく変化する中東情勢を見てきたが、シリア人ボランティアとの交流を思い出すと、今でも感極まって胸がいっぱいになるという。

「トルコにやってくる難民の誰もが無傷で脱出できる可能性は、それほど高くないと分かっていただけだと思います。家族が銃で撃たれるか、そうでなければ

爆弾で死亡するかもしれないのです。そしてトルコに辿り着いても仕事を見つけることができません。彼らの話では、自分たちの経験は互いによく似ていて、もし慈濟がいてくれなかったら人生が好転しなかったそうです」。

林さんは若い頃、リビアに留学し、卒業後は先ず台湾の駐リビア事務所で働いた。そこで同じ台湾出身の留学生だった胡光中（フー・グオンジョン）さん出会った。二人は同じ大学の先輩と後輩だった。数年後には別々の道を歩んだが、それ以後も連絡は取り続けた。

二〇一一年二月十七日にリビア革命



●台南慈済中学で、マンナハイ師長と姚智化校長（右）が向かい合って交流し、林楠松さん（中央に立っている人物）が通訳を務め、両者の円滑なコミュニケーションを支えた。

が勃発しました。私たちが台湾を出発してリビアに戻った、その日です」。その年は、親戚を訪ねるために妻と息子を連れて台湾に帰国したのだが、リビアに戻った途端、暴動に遭遇した。無事にそ

の場は離れたものの、避難する途中で銃声や砲声が絶えず、ちょっとしたことで飛行機に乗れなくなる可能性があった。「リビアの情勢不安が二十点としたら、シリアは八十点だと言えるでしょう。戦

争というものは容赦がないのです」。

二〇一四年に台湾に戻って定住した林さんは、台湾とアラブ諸国の交流活動で、よく通訳として招かれた。また、後輩で、慈済トルコ連絡所代表を務めるようになった胡さんの大切なサポーターとなり、中国語とアラビア語の翻訳で慈済トルコの活動を支援するだけでなく、信仰の面でも励ましてきた。胡さんによると、同じイスラム教徒である友人や親戚の多くは、彼が慈済に参加したことを理解してくれなかった上、彼が「宗教を放棄したのでは？」と誤った考えを持つ人までいたという。「しかし、林さんがい

わなければならず、精神的にも肉体的にも疲れたが、楽しかったそうだ。

林さんは、法師が仏陀の故郷に恩返しをしたいと願う気持ちを例に挙げ、ネパールやインドといった仏教の聖地にも助けを必要としているイスラム教徒の家庭がたくさんあるのだから、イスラム教徒も同じようにケアできる、と信じている。慈済の民族や宗教を差別しない大愛精神こそ、戦火のさなかにある中東が切実に必要としているものなのだ。

「心に憎しみを抱いている場合、テクノロジーは殺戮を助長する道具となるのです。慈済の大愛は、世界の安定に重要

つも私を励ましてくれたので、他人が何を言おうが気にすることはない、私たちの活動はアッラーがご存じであればいいのだから、と言いました」。

この二年間、林さんは台中に住み、シリアの慈済ボランティアと證嚴法師、慈済人たちの通訳の架け橋となってきた。二〇二四年の年末、シリア人ボランティアチームに同行し、海外の慈済人認証式が円満に終わった。台南慈済中学校との交流、台北のモスク訪問などの重要な活動にも付き添った。スタッフには中国語とアラビア語の通訳が一握りしかないため、林さんはほぼ一日中、頭と口を使

な役割を果たしています。人心が平静になれば、安定を感じるようになります。外の世界がどんなに混沌としていても、少なくとも自分の心だけは安定を保つことが大事です」。

翻訳する過程で、「無縁大慈、同体大悲」（見知らぬ人に大慈をかけ、相手の身になって悲しむ）という大愛を理解した林さんは、アッラーへの信仰心は少しも変わっていないが、視野が以前よりも広くなったと確信している。「紹介する人として役割を果たすことで、長い年月をかけて発展してきた慈済に、少しでも貢献できればと思っています」。

スマトラ島沖地震津波から二十年

インドネシア・アチエ

もう一度与えられた命

アチエ州最大のバイトゥラフマン・グランドモスクの前に、静けさと安らぎが広がっている。人々はランブーク海岸を散策し、自然が織り成す美しい風景を楽しんでいる。

二十年前、この地が災害に見舞われた時の光景は、忘れられてはいない。人々は、今も大津波で無くなった家族や友人のために祈りを捧げると同時に、これは天から与えられた二度目のチャンスであり、力強く生き続けている。



インドネシア・スマトラ島のアチエ州ランブーク海岸は、20年前の津波で壊滅的な被害を受けたが、現在は観光地として復興を遂げている。(撮影アリマミスルヨアスモロ)

インドネシア・アチエ州のバンダ・アチエ市から約二十キロ離れた

ランブーク海岸は緑豊かな丘のふもとに広がり、青と緑のグラデーションが透き通る海の驚くほど美しい景色は、国内外の多くの観光客を惹きつけている。

ランブーク海岸は、二〇〇四年十二月二十六日の大津波の無言の証人である。当時、アチエ州海岸線に沿ったインド洋でマグニチュード9・1の巨大地震が発生し、大津波が陸地に向かって押し寄せた。巨大な波は住宅やホテルを破壊し、ランブーク村では、住民の半数が亡く

なった。

津波後の数年間、心に傷を負った住民たちは一時期、再びこの海岸に近づこうとはしなかった。しかし、復興が進むにつれ、ランブーク海岸の観光業も徐々に回復した。そして近くのランブーロ村には、津波によって民家の屋根の上に打ち上げられた一艘の漁船が、バンダ・アチエ市政府によってそのまま保存されている。当時、激しい波の中を人々はこの漁船によじ登り、一切が収まるのをじっと待った。この漁船は、五十九人の命を救ったのだった。

アチエ州で十万人以上が命を落としたあの災害から二十年が経ち、そこは、今ではアチエの人々の不撓不屈の精神を象徴する場所となっている。

津波発生から二日後に被災地に入った

二十年前、中国上海で家族と年末の休暇を過ごしていた慈済インドネシア支部の副執行長の郭再源（グオ・ザイユエン）さんは、花蓮本部の職員からの電話で、津波がアチエを襲ったことを知り、急遽

ジャカルタに戻り、直ちにボランティアを招集して、各種支援物資を緊急に調達した。慈済インドネシア支部の執行長劉素美（リュウ・スウメイ）さんはその時、台湾で両親と休暇を過ごしていたが、直ちにジャカルタに戻った。

朝から晩まで続いた緊急会議を経て、十二月二十八日には第一回の人員と物資が派遣されることとなり、午前四時、十一人のボランティアがジャカルタのハリム・ペルダナクスマ空港に集まった。そのうち三人は医者だった。飛行機の貨物室には食料、毛布、医薬品など十二



津波の衝撃で民家の屋根の上に打ち上げられた漁船。当時59人の命を救い、今は教育施設の一部となっている。(撮影・アリマミ・スルヨ・アスモロ)

トンの救援物資がいつぱい積み込まれていた。

それは津波発生から三日目のことである。アチエ州の通信網は完全に遮断され、大型旅客機も空港を離着陸できなかった

ため、郭さんは小型民間機フォッカーF50を手配して現地に向かった。アチエのスルタン・イスカンドル・ムダ空港に到着すると、悲痛に満ちた雰囲気を感じ、多くの被災者が素足で空港に向かって駆

け寄ってくるのを目にした。「ある被災者は二日間何も食べておらず、自宅から半日かけて歩いてきたとのこと。理由を聞いてみると、反政府武装勢力がこの機に略奪を行うのではないかと恐れ、逃げてきたのだそうです」。

多くのアチエ住民が近隣のメダンへ避難したが、家族と離れ離れになってしまった人も多数いた。メダンの慈済ボランティアもすぐに動員され、救援ステーションの設置や物資配付の準備に取り掛かった。

津波が発生する直前、当時のスシロ・バンバン・ユドヨノ大統領は、インドネ

シア最東端のパプア州ナビレで、一カ月前に起きた地震の救援活動の視察中だった。北西に位置するアチエ州で大災害が発生したことを知った大統領は、慈済の慈善活動を良く知る社会部のバフティアル・チャムシャ大臣と共に、直ちに現地に向かった。

当時の大統領専用機は、現在のように高性能ではなく、マカッサルとバタムで給油した後、アチエのロークスマウエに到着したのは夕方のことだった。町全体は破壊され、ヤシの木は一面に倒れ、亡くなった人々の遺体が至る所に見られた。翌日朝九時にバンダアチエへ飛んだ

が、飛行機の窓から見渡すと、町のインフラは破壊されて、廃墟となっていた。着陸後、チャムシャ大臣は慈済ボランティアのチームに会ったが、誰もが深刻な面持ちで、目の前の深刻な被災状況にどう対処すればよいかと戸惑っている様子だった。

「大統領閣下、私たちは今朝着きました。一部の救援物資はすでに倉庫に搬入され、その他の物資も準備中です」と郭さんが大統領に報告した。慈済は、まず被災者を収容するためのテント村を設置する予定だった。

「どれだけの住宅を建てる予定ですか」

と大統領が尋ねたので、
「千戸か二千戸であれば、建てる手伝いができます」と郭さんは誠意をもって答えた。

ボランティアたちは、大統領一行とバンダアチエの被災地を視察した。「途中で、突然車が止まったので、私たちも大統領に続いて車を降りました。近く空き地に、たくさんのお体様が置かれてあったのです。大統領は、犠牲者のために祈りを捧げるよう、その場にいた全員に促しました。一分間の黙祷の後、私たちは次の場所へ向かいました。私は今でも、たくさんのお体が道端に置かれてい



(撮影・顔森沼)

数万人が命を落とした大津波発生から10日後、バンダアチェ市内には異臭が漂っていた。激しい波に押し流された一艘の漁船が、市中心部のホテルの前で止まっていた。

た光景を忘れることができません。あの場所で私たちは大自然の力を目の当たりにし、人間の力では対抗することができないことを痛感しました」と郭さんが語った。

五年かけて住民の生活を再建

援助活動の初期、インドネシア慈済は三つの支援拠点を設置した。ジャカルタに対策本部を置き、メダンに物流センターを設け、バンダアチエで直接、物資の配付を行った。また、慈済はアチエの再建に向けて三段階の復興計画を策定し

もしました」と語った。彼女は、メダンとジャカルタのボランティアたちに心から感謝している。少なくとも五年もの間、アチエを訪れては住民に寄り添ってきた。「ジャカルタの李彬光（リー・ビングオン）師兄は大愛村建設の主要責任者で、アチエとジャカルタを六十回以上往復しました」。

また、師姉（女性ボランティアの呼称）たちは、炊き出しのために現地での滞在は数カ月にわたった。劉さんは当時を振り返り、「師姉たちの功績も大きいのです。師兄たちが前線で奔走していた時、その後方で三食の食事を支えて

た。短期的には救援と医療サービスを提供し、中期的には仮設テント村を設置して被災者が住む場所とし、そして長期的には三カ所に「大愛村」を建設するというものであった。その三カ所とは、パンテリー地区、ヌーフン地区、そして西アチエ県のムラボ市である。

多くの男性ボランティアたちは、初めて被災地に入り、住宅の中や海岸沿いから遺体を運び出した経験を思い出すそうだ。劉さんは、「師兄（男性ボランティアの呼称）たちは本当に大変でした。中にはジャカルタに戻ってきた後も、服に遺体のおいが染みついていたと言う人

いました。ある時、中国からきた救援チームが慈済ボランティアたちを見かけると、師姉たちに『長い間、お粥を食べていないので。作っていただけませんか？』と尋ねました。すると師姉たちは、もちろんですと答え、『ご飯を食べたい時は、いつでも来てください』と言い添えました」。

なぜ、慈済は五年もアチエに寄り添って来たのか。劉さんは、「大愛村を建設し、住民は既に入居しましたが、コミュニティの管理も指導し、彼らが自立できるようにしたのです。また、土地の権利証の手続きも手伝って、政府から各世帯の

住民に引き渡されたのです。これらのプロセスには長い時間が必要でした」と説明した。

慈済の医療チームも、被災地で治療を実施した。多くの外部団体は現地の文化習慣を理解しておらず、最終的にいくつかの国の医療チームはそのまま薬を慈済に託した。「アチエの住民はイスラム教を信仰しており、皆保守的です。慈済人

医会（慈済の医療ボランティアチーム）の医師にはムスリムの人が多く、また、薬の説明もインドネシア語で行うので、現地の人々には受け入れ易かったのです」。

災害から思いかけず得られた平和

二〇〇三年に慈済インドネシアは、全国で五万トンの米を配付した。その配付地域の一つがアチエだった。

当時、反政府武装勢力が「自由アチエ運動」を展開して、社会情勢が不安定となり、慈済の配付は容易ではなかった。劉さん

は、「反政府武装勢力は慈済が現地の人々を助けるために来たことを知り、協力してくれました。慈済の車列を見かけると、安全に通過させてくれたのです」と語った。

慈済は、津波で被災した人々のために3つの大愛村を建設した。最も規模が大きい大愛村は、西アチエのムラボ市にあり、約1100世帯が入居している。3つの大愛村を合わせると約2700世帯で、住民の資格審査、建設、引き渡し及び入居といった一連のプロセスには4年以上の歳月を要した。（撮影・アリマミ・スルヨ・アスモロ）





大愛住宅は一戸あたり約36坪の広さで、リビングルームと寝室2部屋、キッチン、バスルームが備えられている。さらに表と裏には庭があり、住民が緑を植えることができ、緑豊かな環境となっている。(撮影・顔霖沼)

二〇〇五年末にパンテリー大愛村が完成し、その住民の中には被災した反政府武装勢力の者もいた。劉さんは力強く言った。「被災者がいる限り、私たちは手を差し伸べるべきです。今、大愛村では反政府武装勢力と住民たちとの間には、もう対立や衝突はありません。とてもよい縁なのです」。

かつて「自由アチエ運動」の司令官だったムザキール・マナフさんは、津波で七人の家族を亡くした。彼は慈済の大愛を目の当たりにし、「もし誰かが私たちを真心で助けてくれるならば、私たちは真摯に感謝すべきであり、それ

妨害してはなりません。とにかく、私たちは慈済がアチエに来てくれたことにとても感謝しています」と語った。

アチエ州代理知事のサフリザルさんは、津波の前からアチエは長年にわたり紛争状態にあり、この津波がアチエと世界に、平和こそが最良の道であることを気づかせてくれたと述べた。「二〇〇五年八月十五日、インドネシア政府と『自由アチエ運動』がヘルシンキ和平合意に署名したことは、一番の証と言えます。アチエの人々は、災いが転じて福を得たと言えるかもしれません」。

またサフリザルさんは、津波から二十

年が経った今もなお、アチエの住民たちの心の奥深くに複雑な感情を抱いていると言った。「災害による悲しみは依然として存在しており、犠牲となった肉親を思い出すと、今も思わず涙がこぼれるそうです。この傷は永遠に癒されることはないのかもしれませんが」。

当時、世界六十の国と地域から数百の団体が、その難関を乗り越えられるようにと支援にやって来た。アチエの人々にとって、忘れることができない出来事である。「私たちは非常に感動し、慈済がアチエの人々に寄せてくれた愛と関心に、心より感謝しています。津波が発生

した時、情勢がまだ不安定で、多くの団体はアチエに入ることを躊躇していましたが、慈済は真っ先に、見返りを求めず、手を差し伸べてくれた団体でした」。

慈済は、駆けつけたことで、人道精神があらゆる隔たりを超えたことを意味した。サフリザルさんが最も印象深かったのは、慈済が住宅というハード面を提供したのみならず、愛のこもった形で支援を行ったことである。「慈済が建てた住宅は、最高の建材を使い、高い耐震基準に合致するように設計されており、住民の住み心地も十分に考慮されました」。



メダンのボランティアが 善の循環をもたらした

メダンはアチエから百キロ以上離れているが、慈済ボランティアは訪問を続け、配付活動、施療、環境保護の推進、ボランティア研修などを行った。メダンのベテランボランティア、楊樹清（ヤン・スーチン）さんは、「ア

2006年にパンテリー大愛村に入居したリナ・グステイアナさん（右端）は、現在は慈済ボランティアだ。チャリティー販売に地域住民と一緒に参加している。

チエ慈済ボランティアの最初の種子である彭文窗（ボン・ウェンツワオン）さんの献身と寄り添いの姿勢に、とても感銘を受けました。大津波の数日後、彼はジャカルタから駆け付け、現地で愛を募る活動をしていました。私がアチエに

来た時には、すでにそれら愛の種が芽を出していたので、付き添いの過程で、少し肥料を与え、彼らを日の当たる場所に導くだけで、立派に成長するのです」。

現在、アチエには百五十人以上の慈済ボランティアがいて、バンドアチエ市、ヌーフォン地区、ムラボ市、ロークスマウエ市など、十の地域を網羅している。津波

後にアチエに定住した彭さんは、すべての地域に慈済ボランティアがいて、災害時にすぐ駆け付けて支援できることを願っている。

リナ・グステイアナさんは、十三歳の時に津波に遭遇した。三十メートルもの黒い巨大な波が建物や車の残骸を巻き込みながら押し寄せ、彼女は家族と避難中に離れ離れになった。善意ある人々の助けで、冠水地帯を越え、遺体の間を通り抜け、最終的に民間テレビ局前のテントで家族と再会できたことに感謝している。

二〇〇六年、彼らはパンテリー大愛村

に引越し、今に至っている。リナさんは普段、子どもたちにコーラン経を教えしており、次世代に良い品格を育む責任があると考えている。また、夫と共に脳卒中の高齢者の世話にも尽力している。二〇二四年四月には慈済ボランティアとなり、地域の家庭を一軒一軒訪ねて募金集めをして、住民が共に善行することを呼びかけている。

同じくパンテリー大愛村に住む廖賜泳（リャオ・スーヨン）さんは、今年二十六歳だが、当時、一家で或るホテルの五階に上って避難し、木材やトタン板など様々な雑物を巻き込んだ黒い津波か

ら逃れることができた。水が引いた後、或る寺院に避難したが、祖父母と叔父、叔母を亡くした。

廖さんの父親はラジエーターの溶接で生計を立て、母は仕立屋だった。二〇〇六年、慈済が公園や学校、礼拝堂を備えたコミュニティに、安心して住める家を提供してくれた。慈済ボランティアのケアは細やかで、教育のことも考慮してくれた。廖さんは、「二〇一〇年から二〇一六年まで慈済の奨学生として、中学と高校を無事に卒業することができました」と言った。

二〇一四年、廖さんの父が病で亡くな

り、彼は毎日、母と自分のために祈った。

数年間の低迷期を経験した後、立ち直った。「低迷期から抜け出せたのは、多くの人の愛があったからです。特にお寺の友人や慈済の師兄・師姉たちの支えでした」と振り返った。

二〇二二年、廖さんはボランティアに加わった。週に一日しか休みはないが、その時間を有効に使って、慈済の活動に参加している。「慈済では学ぶ機会がたくさんあり、翻訳、記録、事務作業など様々な仕事を通して、自分の異なった潜在能力を引き出し、毎日が新しい体験なのです」。

恐怖心から

感謝と恩返し of 気持ちに変わった

二十年が経ち、大愛村の住民の多くは、慈済が建てた住宅を当時のまま大切に使い、良好な状態を維持している。これは建材の質の高さを物語っている。一方で、経済状況が改善した一部の家庭では、二階建てに増築したり、店舗に改装して商売を始めたりの様子も見られる。

ヌーフン大愛村区長のアルフィアンさんは、津波で妻を亡くした。「当時から今に至るまで、慈済は私たちのコミュニ

ティをずっと気にかけてくれました。私
たちも人助けをして恩返しすべきだと思
います」。彼が慈済ボランティアになっ
たのは、その恩に報いるためだった。

住民のスリ・ワユニさんは、バンダア

チェ市の環境局で臨時職員として働きな
がら、慈済ボランティアとしても活動し
ている。自宅の一部を慈済の活動スペー
スとして提供し、定期的に献血活動やケ
ア世帯への物資配付を行っている。また、

インド洋大津波

慈済のインドネシア・アチエ支援

被害状況

2004年12月26日午前7時59分、スマトラ島南西沖の海底でマ
グニチュード9.1の地震が発生し、津波が引き起こされた。津波の高さ
は最大30メートルに達し、アチエ半島沿岸は約5キロメートルにわた
り津波に襲われた。海上の船舶は住宅地に衝突し、家屋や樹木が次々と
破壊され、10万人以上が犠牲となった。

支援活動

- 2004年12月29日より、食料、
医療支援、薬品、日用品の緊急援助開始。
- 2005年2月、バンダアチエ、ムラ
ボ市のセント村、ルサク村、トゥノム
村に計**3250**張のテントを設置。
- 2005年2月から2007年11
月まで定期的に米を配付し、合計
7000トンを支援。
- 2005年末、最初の大愛村が入居
開始。合計3つの大愛村を建設し、
2700世帯が入居。内部にはリビング、
寝室、台所、浴室、前後の庭があり、
村には学校、モスク、公園などの公共
施設も整備された。

- 首都
- ◎ 大都市
- 州境界線



米貯金を奨励し、各家庭が日々、節約した一握りの米を困っている近隣住民に寄付している。

「津波の時、弟と一緒にモスクのドームの上まで登って難を逃れました。その夜、やっと夫と再会できました。あの日はまるで世界の終わりのように思え、二十年が経った今でも、海を見るたびにあの恐怖が蘇ります。モスクの前を通り過ぎる時もいつも、あの時の体験を思い出します」。今では恐怖心も感謝の心に変わったと語るスリさんは、モスクに避難して生き延びることができたことと、天からもう一度命を与えられたことに感謝

謝している。

「真つ先にアチェの人々を助けてくれたのが慈済でした。ゼロから今に至るまで、私たちに寄り添ってくれました。他の団体は一度支援をして終わりでしたが、慈済は住まいを提供してくれただけでなく、その後の生活までずっと見守ってくれました。このことは、私の心に深く刻まれています」。今も津波で亡くなった方々のために祈り続けている。「彼らが安らかに眠れますように」。そしてもっと重要なのは、呼吸をするたびにその瞬間を大切にし、毎日を前向きに生きることだ！（慈済月刊七〇一期より）

命の贈り物

◎口述・王翊親（台中慈濟病院第三ICU副看護師長）
整理・蔡嘉琪（月刊誌『慈濟』編集者） 訳・何慧純

私の心の奥にある誇り

私は、看護主任を務めるようになってから、いい看護チームは、技術や経験の蓄積だけでなく、それ以上に、プレッシャーや緊急事態の中でも、互いに尊重して支え合うことが、大切だということを一層実感した。

忙しい中でも優しく声をかけ、患者を落ち着かせ、プレッシャーを感じながらも

職場を守ってきた同僚の姿を見たことがある。彼らこそが、私の心の奥にある誇りである。

I CUは特殊な部署であり、毎日人間の強さと脆さを目の当たりにする。そこでは、ある人は意識がなく、ある人は奇蹟的に目を覚まし、ある人は肉親の手を握って、最期を迎えようとしている。そこでは、死はニュースではなく、仕事の合間の日常茶飯事である。看護師にとって、死は慣れているとは言っても、無関心なのではなく、一回ごとの呼吸や目を開けて、言葉を交わせる瞬間の尊さが、より深い実感を与えてくれる。生と死の狭間に見え、そこで感じる命の重みは、死を恐れることではなく、より真剣に生きることの大切さを教えてくれる。

私はかつて、八十歳を超えた患者を世話したことがあるが、彼は気管挿管したため、声を出して話すことができなかった。しかし、その眼差しから、命への強い渴望が感じられた。また三十代の若い父親を看取ったこともある。多臓器不全の状態で約三週間持ち堪えた後、この世を去った。ここでは、私たちは家族と共に教えきれない夜を過ご

し、彼らの認めたくない気持ちから号泣し、やがて平静になって、それを受け入れる過程に付き添ってきた。

I CUで約十年間働いてきたが、そこは緊迫したテンポと共に極めて重要な場所であり、他の部門と協力し合う必要がある、とつくづく感じた。チームには、医師、看護師、呼吸療法士、薬剤師、ソーシャルワーカー、栄養士など、さまざまな専門職のスタッフがおり、どの職種も欠かせないパートナーである。私たちは互いに信頼し合い、即座にコミュニケーションを取ることで、患者にとって最適な治療計画を立てている。

看護師は、チームの中で伝達する役割を担っている。私たちは患者に最も近い存在であり、その小さな変化にいち早く気づき、医療情報を伝えることができる。私たちは単に医師と患者をつなぐ架け橋ではなく、それ以上にゲートキーパーであり、患者と家族の感情面での拠り所なのである。

看護主任になってから、よい看護チームとは、技術や経験を積み重ねるだけでなく、プレッシャーと緊急状態の中で、互いに尊重し支え合うことができるものだと感じている。同僚たちが忙しい業務の中でも、患者に優しく声をかけて慰め、プレッシャーに見舞われても、自分の役割をしっかりと果たしている姿を目にしてきた。彼らを私は心の奥で誇りに思っている。

五月十二日は国際看護師デーであるが、心から深い敬意と感謝を、今、第一線に立っている白衣の天使たちに捧げたい。「あなたたちはその両手で命の重みを支え、愛でもって患者と家族の一縷の望みを守っているのです。その努力が必ずしも世間に見えるものでなくても、きっと誰かの心に深く刻まれていると信じています。これからも、揺るがぬ意志と優しい力でもって、看護の道を歩み続けることを願っています」。(慈済月刊七〇三期より)



愛と善は唯一の方向

異なった宗教でも方向は同じ、それは善と愛。



感謝、尊重、大愛

五月五日、基金会の管理職と職員たちの報告を聞いた後、上人はこう開示しました。「慈濟では、国内外の不思議な縁による出会いの話を聞きます。異なった宗教が無私の大愛のために同じ理念を

持っているのです。宗教は人々を導いてくれますが、その方向は善と愛です」。

宗教処の職員である黃靜蘊（フワオン・ジンユン）さんは、次のように語りました。「四月三十日、トルコの慈濟人が二十名のシリア人ボランテニアに慈濟委員の認証を授けました。その中には、海の

事故で亡くなったマンナハイ学校の教師アナス・カバニさんとモハメッド・アルカナフエさんも含まれており、彼らの未亡人が出席して受領しました。アルカナフエさんの妻のルビさんは、ご主人の精神と使命を引き継ぎたいと発願しました」。

上人はこう言いました。「無常が目の前に現れ、二人の教師は不幸にも命を落としてしまいました。奥さんたちの悲しみは余りあるものでしょう。しかし、幸いにも慈濟という大家族の中で、多くの

人が愛を以て彼女たちに寄り添ってくれました。この愛こそがこの世で最も温かみのある情であり、この愛を捧げる人こそ仏教で言う『覺有情』なのです」。

『覺有情』は、見返りを求めない奉仕をして、あらゆる人を自分の肉親のように愛護し、大切にします。この敬虔な大愛は宗教を問いません」。

「台湾は慈濟発祥の地です。この愛は台湾に始まり、小さな一粒の種のように、土と空気、水、日光を取り込み、この世に縁を結ぶことで芽を出すことがで



20名のシリア人ボランティアがトルコで認証を授かった。
亡くなったアルカナフェさんとアナス・カバニさんという二人のボランティアの妻たち（左から一人目と二人目）は、夫たちの精神と使命を引き継いだ。
（撮影・ムハンマド・ニムル・アルジャマル）

きました。そして、時間の経過と共に一本の大樹に育ち、毎年花を咲かせて成果を収め、無量の種を作り出しています。しかし、全ての種が縁を結んで成長できるのででしょうか。もし水や土、日光、空気などの要素が種と出会わなければ、暫くすると、種の活力は消え、芽を出すことはできません。従って、私たちは縁を

逃さず、全ての種からやがて無量の果実が実ること、数えきれないほど多くの種を得られるのです」。

源が同じ「因」だからといって、同じような「果」をもたらすとは限りません。人の心や考え方は、それぞれ違うからです。上人によれば、もし同じ事に対して、誰もが自分の意見に執着すれば、元来は

単純な事も複雑化してしまっています。地球の人口が増えるにつれ、人の心や思想は益々複雑になり、その上、欲に任せて地球を開発し、破壊し、環境汚染を引き起こしているため、地球は危機に直面しています。慈済が大衆の先頭に立って資源の回収を行い、回収物の再利用をすることは、地球環境の汚染と破壊を軽減する一つの方法です。

「衆生は果てしなく輪廻を繰り返しますが、私たちが輪廻させるべきは、善でしょうか、悪でしょうか。善と悪の違いは、習慣の違いから来るのです。同じような

環境下でも、人はそれぞれに業（カルマ）を背負って、縁のある人たちと繋がりができます。肉親の情、友情、愛情等々、情は感覚的なものですが、どのような情で人々を愛すればよいのでしょうか。菩薩は覺有情とも言われますが、無私の大愛を以て世の衆生を愛し、天下のあらゆる物を大切にします。善に向かって進みさえすれば、それは善の道と愛の道、人徳の道を歩んでいることになります。もし方向が間違っているか、認識がずれていたら、元来は良いことであっても、権力や利権争いに使われてしまい、非常に良く

ない結果をもたらします」。

「ですから、些細なことも軽んじてはなりません。一瞬の間違ひは些細なことのように思えますが、善の念を起せばこの世を利することができる一方、僅かに逸れたなら、この世に悪影響を与え、苦難をもたらします。この世の物事自体には善も悪もなく、それを使う人の見識と心の持ち次第なのです。従って、宗教によって人々を導く必要があるのです。世の宗教にはそれぞれの名称があります。その主旨は皆、愛と善を向いており、

人は元来、善良であると認めています」。

「たとえ宗教は違っても、進む方向が善に向かっていれば、感謝と尊重、愛の心で共に進み、この正しい道を歩んでいかなければなりません」。また、「凡夫の心は兎角お互いを区別し、排除し、利益のために争います。もし世の衆生が事理に明るく、規則を守り、皆で正しい方向に向かって歩めば、心は清らかになり、争うこともなく、平穏な日々を過ごすことができるのです。それが、この世の浄土なのです」。（慈済月刊七〇四期より）

台湾 Taiwan

● 台風4号（ダナス）が7月初めに台湾南部を襲い、被害をもたらした。慈済は7月中旬から嘉義県と台南市で百戸余りの家屋の修繕を開始した。工期は台南が8月末、嘉義が9月中旬までを予定しており、同時に各地区のボランティアがチャリティバザーを催して再建と修理の経費を募った。



2メートル以上の高さで工事する場合は高所作業にあたるため、専門家チームが安全基準を満たした装備を使用して行う。慈済ボランティアは建材の運搬や工事現場の整理を手伝った。（撮影・黄筱哲）

● 32年前に設立された慈済骨髓幹細胞センターは、世界でも稀に見るほど密度も効率も比較的高いデータバンクである。台湾の人口は約2300万人であるが、今年7月には非親族間での適合件数が累計で7000件を越え、患者は31の国と地域に分布していた。アジアまたは世界での適合率は、国際間においてその重要な地位と貢献度を示しており、3年続けて世界骨髓バンク機構(WMDA)から上級認証を得た。

● 1998年の元日から放送を開始した大愛テレビ局は、同月3日より證嚴法師が開示をする番組『人間菩薩』を毎日放送してきた。この番組は、今年8月28日に1万回を迎えた。

● 大愛テレビの番組『白冷会の愛／半世紀にわたるケア』が、「社会の明るい面を伝える報道賞」においてテレビメディア部門の佳作を受賞した。番組制作センターの職員である吳志怡さんと林建利さんは、スイスのカトリック教会宣

教師たちが台東で貢献した証を記した。

ミャンマー Myanmar

● マンダレーは3月末の地震の後、物価が高騰し、被災者の生活は一層苦しくなった。慈済は8月上旬に再びアマプーラ町で3901世帯に対して、1世帯当たり米24キロ、食用油1リットルを配付した。8月中旬にはパ・レート郡で米と食用油、福祉ベッドなどの物資を2559世帯に配付した。

エチオピア Ethiopia

● 今年からアメリカを含む海外からの資金援助が大幅に減少し、アフリカ・エチオピアのダブルレベルハン難民キャンプの生活は益々苦しくなった。慈済は7月から6カ月間の予定で食事を提供して8歳以下の子供1350人を世話し、7月から8月にかけて3000世帯に食糧を配付した。

● 慈済は1993年からエチオピアで給水ステーションとクリニックを設置すると共に、病院建設の支援を開始した。2022年からは、現地のキリスト教系慈善団体キッドミア・マヒバーと協力して北部の内戦から避難した人々に食糧支援を行っている。2023年より西部の内戦から避難した人々と南部の干ばつに苦しむ人々への援助を継続し、今年5月末までで延べ55万人以上が支援を受けた。

7月19日の正午、支援スタッフが児童クラスで8歳以下の児童に食事を提供した。子供はカレーとパン、ビスケットを手にすると、食べる前に笑顔を見せた。（写真提供・慈済基金会宗教処）



フィリピン Philippines

● フィリピンの慈済志業は、31年前に医療奉仕から始まった。第283回目の大規模施療が、427の医療スタッフとボランティアを動員してサンボアング半島シブガイ州の州都イピル市で催され、5249名の患者に対して内科、耳鼻咽喉科、小児科、歯科、産婦人科、眼科などの診療と外科手術及びオーダーメイドの義足を提供した。（8月14日～16日）

● 慈済は1998年からサンボアング半島で施療を始め、2000年に連絡所を設置し、2004年サンボアング市に無料で行うリハビリと義足センターをオープンし、2006年にはサンボアング市の医療センターに大愛眼科センターを設置した。

スリランカ Sri Lanka

● 慈済は北西部州の州都クルネーガラにあるビンギリヤ地方病院で大規模な施療を行った。スリランカ、シンガポール、マレーシア、台湾などからの医療スタッフとボランティア285人が協力し、延べ4293人に対して、内科、歯科、眼科及び中医の診療を行った。（8月15日～17日）

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈济医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈济病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈济病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈济病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈济病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈济病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
斗六慈济病院
640 雲林県斗六市雲林路2段248号
TEL: 886-5-5372000

慈济大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈济人文志業センター
112 台北市立德路 8 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989000
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部（San Dimas）
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ニューヨーク支部
（New York）
TEL: 1-718-8880866

カナダ Vancouver
TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo
TEL: 55-11-55394091

イギリス London
TEL: 44-20-88699864

フランス Paris
TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg
TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam
TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg
TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna
携帯 : 43-6602053428

南アフリカ Gauteng
TEL: 27-11-4503365

中国蘇州
TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh
TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL: 95-9-260032810

マレーシア
セランゴール支部 KL
TEL: 603-62563800
ペナン支部 Penang
TEL: 604-2281013

シンガポール
TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta
TEL: 62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota
TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman
TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul
TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL: 64-9-2716976

慈濟

2025年9月19日発行・345号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈济伝播人文志業基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路8号

編集 慈济日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈济基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈济に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）



リサイクルボランティアの願い

80歳のリサイクルボランティア、陳秀雲さんは、毎日リサイクル活動に出掛ける。宜蘭で生まれ育った彼女の、その土地と海に対する思いには格別なものがある。時折バイクで海岸に出かけては辺りを見渡すのは、ビンや缶、プラスチックが一つあっても、環境の負荷になるため、それを拾って回収せずにはいられないからだ。

末期がんの治療を受けている彼女はとても辛いはずだが、「病気のことはばかり考えず、できることはやりたい」と言う。2014年から去年末までに彼女が回収したペットボトルは、76万5千本に上る。「生きているうちに百万本を回収することが目標です」と願を立てている。（詳しくは今月号の「大地の守護者」の報道をご覧ください）



慈濟日本サイト



慈濟ものがたり